

はじめに

人の心の奥底から静かに湧き上がってくるものであるはずの、生きていられる幸せや落ち着き、そういうものまでがすべて金まわりの良し悪しとともに増減すると錯覚しがちの世の中にあつて、「こんな時代だからこそ良寛に学ぶ意義がある」と考える人も多い。しかし、たいてい、そういう人は「自分は禅僧でないから良寛には学べない」とすぐに思ってしまう。自分も三十年ほど前まではその一人だった。が、次々と詩集や歌集、研究書が刊行され、高校の教科書にも和歌が入っているのを見ると、「人々が良寛に見出している『良きもの』とは何だろう」と思いはじめ、気の向いたときに和歌や逸話を拾い読みするようになった。そんなことを繰り返しているうちに、それらの和歌や逸話の底に正直に生きる良寛の姿がほの見え、「ぎつと、この当たり前のことが『良きもの』なんだろう」と考えて良寛を分かった気でいた。当時の自分は、良寛がそのように生きつつ、どんな厳しさを自分に課していたのかという点には、まったく気付かないでいた。

それどころか、漢詩も和歌も、良寛自ら何度か自作の集を編もうとしていることを知って、名欲にとらわれぬほどに修行を積んだ禅僧なら自分の詩集や歌集を残そうとはすまい、と不思議に思うと同時に、「そんなことをする良寛は、実は俗人だったのか？」とさえ思った。

やがて、この「詩集や歌集を残そうとした理由」を知りたくなって主要な良寛研究書に当たってみたが、そこを解明している記述に出会うことはできず、このことは自分で調べて自分で納得するしかないと思った。そこで、最初に立ち戻って思考の仕方を変え、「もしかすると、正直に生きる良寛だからこそ、自作の集を編むべき特別な理由があ

ったのかも知れない」——そう考えてみた。もし、その特別な理由の有無を知ることができれば、そこが入り口となつて、良寛の生きようがもつとよく見渡せるかも知れない、まずはそのことから始めよう、と手探りを始めたのである。そして、その手探りを続けてゆくうちに、やがて次の二つの視点を得るに至つた。

① 将来、今よりもつと自分に正直に生きるための手がかりとして、現在の良き経験も悪しき経験も可能な限り記録しておく必要があつて、もつぱら自分のために漢詩も和歌も作つたのであり、反省のためにはそれらの作の推敲を、また、広がる経験則を保持するためには作の取りまとめを必要とした。

② 後半生においては、禅僧の思考様式は保ちながらも、むしろ、人々とともに生きる一人の人間として、より普遍的な生きようを求める方向に、自己の生き方の重心を移していった。

この①、②のそれぞれに核として存在するのは、①では「自分に正直に」ということであり、②では「人々とともに生きる一人の人間として」ということである。実際に良寛が①、②のように生きたのなら、その二つの核は、程度の差こそあれ、我々社会人たる者なら誰でも心に置いておくことだから、良寛は誰にも理解が可能ということになる。だから、禅について知識も経験もない自分でも、良寛を遠望するくらいはできるだろう、そう考えることができた。しかも、良寛の具体的な言動はこの①、②から発していると推測されたし、具体的言動に現れ出る過程には、禅、儒家、道家の考えが通過すべきフィルターとして存することも察せられた。

そして、もし、自分が①、②の生き方に徹するならどうするだろうかと考えてみて、その場合に大切なのは「(自分が)何をどうしたか」であつて、「何時(その行為を)したか」ではない(「何処で」の方は、その場面を想起する際に必要な場合がある)、と思いついた。もし、良寛が①、②の生き方を厳格に生きたのなら、良寛が数多く残した漢詩や和歌には、

むしろ「何時^{いつ}」は記録されないはず、ということになる。そこで、実際に良寛関係資料を見てみると、他人が記したものの、例えば、良寛示寂の年月日については、どんな疑問も挟む余地は無いが、良寛自筆のものには、逆に何一つ正確な年月日の記入は無い。この状況は、良寛の生き方が正に①、②そのもので、「(自分が)何をどうしたか」にだけ心を向けていたことを証明している。

さらに、その①、②のような良寛の生き方が実生活面に表れ出ると、次のような特徴も生じてくる。

③ 周囲の人々の風流、風雅の詠みかけに対しては、良寛も相手に同調して風流、風雅の作を為した。そのために、良寛は風流、風雅を事とした、と誤認される結果になった。

④ 相手への同調が徹底すると、良寛のどんな営みも風雅や美醜の尺度を離れ、書作も含めて生み出されたものすべてが書簡のような性質のものとなる。例えば六曲屏風制作のために漢詩を書くのであっても、それを書いて渡す人以外の鑑賞は考慮しないものとなり、不特定多数の鑑賞を念頭に置いて制作する「芸術作品」の場合とは、基本的性格の点で違いが生ずる。

⑤ 唱和以外の作、すなわち、独往の生活中から湧き上がった作の中のみ、良寛の真面目^{まじめ}は存在する。

⑥ 一般に、和歌や俳句、漢詩というような文学作品は、作者が何かに感動した折に、その感動を表現するのが目的であって、その時の経験を表現してできあがるものだが、良寛の⑤の作品群は、以後の生き方に資すべきポイント^{ポイント}を、文学作品の往時復元力によって思い出すことを目的としていた。そのために、過去の経験を掘り起こして作品化することもあって、描写された場面の時点と詠じた時点との間に、大きな隔たりの見られる作も生じていた。

⑦ 相手に対する言動に誤り無きを期すため、他に働きかける言動が少なくなる傾向を生ずる。

したがって、良寛作品からその生き方を探るには、良寛が他に同調した風雅の作と生き方に直結した作の入り混じった状況から、的確に後者を選び出す、という手続きが最初に必要となる。

ところで、良寛において一番肝心なのは、良寛が人生を探究しつつ生きた、その生き方そのものなことから、右のようにして的確に選び出した作品を羅列し、外に現れ出た言動、外から見えた行為や姿を書きとめてみても、それだけでは良寛の思考や目指すところに繋がらないから、良寛の「人生を探究しつつ生きた、その生き方」を捉えたことにはならない。また、伝わる行為の場面ごとに都合の良い良寛像を描き出して並べてみても、そのやり方ではそれぞれの場面の良寛像ごとに多少の差異が生じてしまつて、統一性に欠けたものになりやすい。さらに、記述する視点が肯定的だったり、否定的だったりすると、良寛の生きようも陽光の中に明るかつたり曇天の下で暗かつたりする。したがって、良寛を言う場合には、良寛の基本像が揺れ動かない確かさを持つと同時に、場面ごとに変化しない視線も必要となる。特に良寛の場合、禅僧、漢詩人、歌人、書家としての世評が高いところから良寛その人を過大に評価する傾向を生じやすい。そこを考えると、良寛の真面目しんめいをいかに正しくとらえるかというある種の節度も必要となる。以上の留意点をまとめると、良寛を正しく見るには「統一性があつて過大にも過小にもならず、しかも、揺れ動かない視点」が必要、ということになる。その視点はどうすれば得られるのだろうか。

これまでの良寛論は、不確定要素ばかりの良寛を外から見、論者の尺度で評価したものばかりだった。良寛を他と比較するにはその方法が有効だが、「良寛はどう生きたのか」という最大の不確定ポイントを解明してゆくには、その方法は問題が多い。実際、この方式で考究、提示された良寛像は「人間離れた聖僧」から「僧形の俗人」まで実に多様だった。どうしてそうなるか。それは、各論者がそれぞれの判断基準を良寛の言行に押し当てながら外から見ると、論者の規準が異なることに良寛は違つて見えるからである。つまり、厳密には論者の数だけ評価の異なる良寛

像が出てきてしまうことになる。そのような外から見た良寛像をいくら多く集積して総合、分析してみても、その結果は必ず相対的なものになって、良寛本人が「これはまさしく自分の生きた姿だ」と肯定するような、「真実の良寛像」とはならない。この弊害を大もとから無くして「真実の良寛像」に肉薄するには、良寛の言行を良寛の心の内にある「生き方の原点」から見る方式にしなければならぬ。そして、その方式をとることによってのみ、「統一性があって過大にも過小にもならず、しかも、揺れ動かない視点」も得られるのではないか。

しかし、良寛を正しく見る視点が内側から見る方式への切り替えで得られると分かつて、その方式でスタートするのは簡単なことではない。それは良寛が「自分の生き方はこれこれだ」と遺墨の中で直接は言っていないからである。そうすると、その「生き方の原点」を探り当てるために、まず、資料中にそれに関する「痕跡」を探し求めてゆくことになる。したがって、その「痕跡」をどこに求めるかということに関して、論者の見識が問われることになる。右に言うところの、良寛の言動を生み出す「生き方の原点」とは、良寛が行うべき言行を思考したり選択したりした一番の根幹部分を意味するのだが、そのような根幹は本性から派生して存在するものというよりは、むしろ、本性に融合し、一体化して存したものとと言えるだろう。

そのような意味での「本性」を、出家後の良寛が禅修行によってひたすら磨いていったのは事実である。そうだとすると、磨いた「本性」は出家以前に既に身内に具わっていたものということになる。この「既に具わっていた本性」は、大人^{おとな}となる以前の幼少年期にまでさかのぼっていつて把握することになるが、それをなしうる手がかりはわずかに二つの逸話（「人遊びはスプリングボード」、「蝶になる」を信じた八、九歳頃」の項を参照）だけだから、この二つの逸話の内側にこそ、その本性を掬^{すく}いとらねばならない。

この二つの逸話の具体的な考察については各項目に譲るが、そこに共通して存在することは、子供の良寛が純朴そのものだったということである。もし、これが良寛の本性だとすれば、禅門に入って本性を磨く修行を続けた後の良

寛においても同じ姿が見えるはず、ということになる。そこで、後年の良寛の姿を見てみると、

ア 自分が各戸をめぐって喜捨を乞う普通の乞食行を、自分は町中にたたずんでいて、自発的かつ純粹な気持ちで喜捨する人が現れてくるのを待つやり方に変更した。(「乞食行の純化が導き出した秘つぎ行」の項を参照)

イ より高次元の生き方があると知ると、迷わずその生き方に自己を進めた。(「仙桂和尚」の項を参照)

ウ 仮名戒語や『論語』による自己研鑽を自分に課した。(「仮名戒語」「合紙としての『論語』」の項を参照)

エ 自分の立場と周囲との調和を常に心がけた。(「生臭ものへの対応」の項を参照)

等があり、自己の本性を磨くに値するものと認定する姿勢、あるいは、そう認めうる本性でありたいと希求する姿勢をそこにかがうことができる。後年の良寛が懐いていたこのような自己肯定の姿勢を、そのまま子供時代の「純朴そのもの」の有りように結びつけて同一としてるのは良寛自身であって、その一貫している姿について、漢詩に「四十前行脚を始めた頃は虎を屈指したが、実際には猫にも似ない有様で故郷に帰り、今、庶民の間に生きていくと、その自分は、ただこれきうじのえいどうし只是旧時榮藏子へである」(三三三)と詠じている。こうしてみると、良寛の本性は幼児期から「純朴そのもの」だったのであり、刻々の反省とともにそれを示寂まで磨き続けたのが良寛の人生だったと判明する。

その「純朴そのもの」という「良寛の本性」が資料中に明確に現れ出ている「痕跡」は、十七、八歳頃とされる逸話の中の「人の生けるや直し」(『論語』第一三六章中の句で、「三峰館入塾から十九歳春までの経緯」の項に掲出した逸話③にある)の一句以外には無からう。——そのように考えられるがゆえに、それを「良寛の生き方の原点」(本性)として良寛の言行を見、その生まれてくる様や本性と言行の密着度に注目して以下に掲げる各項目を考察し、その結果を記した。したがって、本書において良寛の本性の様子を示す際にはこの「人の生けるや直し」を多用することになった。それは、

一つにはこの句が良寛の本性を表すに簡にして要を得たものだからであり、もう一つには若き良寛が言ったとされる句だからでもある。

以上のようにして成ったのがこの一書であるが、どの項目の場合でも、そのきつかけはほとんどが良寛の和歌や漢詩、あるいは伝わる良寛の行為だった。そこで、考察内容をまとめてゆく際にも、項目の冒頭にそのきつかけとなった作品や行為を掲出し、それに続けて手探りで見えてきた様をそのまま記述した。

そのような記述の仕方をとる本書においては、各所に良寛作品の引用が欠かせなかったが、それらすべての良寛作品引用にあたっては谷川敏朗氏編著の、

『校注 良寛全歌集』（春秋社 一九九六年）

『校注 良寛全詩集』（春秋社 一九九八年）

『校注 良寛全句集』（春秋社 二〇〇〇年）

に依拠した（各書籍に付されている作品番号も付記）。

なお、本書においては以下に列記するような点がある。そこで、あらかじめ、その点の存在をおことわりしておきたい（その旨の記載が必要と思われる箇所には、その都度、注記した）。

- 1 常用漢字とその音訓表以外の文字や読みを文中に用いているところがある。
- 2 筆者の視点がそのまま表れるようにするために、漢詩、漢文、書簡等の読みをルビ（現代仮名遣いで記入）とした箇所がある。

3 引用資料との整合性を保つ必要から、「〇月」の言い方も季節の表現も旧曆とした。

4 研究論文の引用にあたっては、敬称をすべて「氏」に揃えた。

5 良寛は禅修行中心の生き方から「一人の人間としてどうあるべきか」という方向へ、より根源的なものを探り求めて思いを深めていったと見られるから、本書では、良寛の一生を大きく七章に分けたうえで、各考察項目をそれぞれに配列したが、各項目を記述する際には、その点に配慮しつつも「その後になんてなったか」とか「さかのぼると何処に行きつくか」に結びつけて一項目にまとめることが多かった。そのため、項目によっては章の範囲を逸脱した内容を含むこともある。

6 既に記したことだが、良寛の作には、詠じられた内容と実際の創作時期がはるかに離れていると考えないと、理解し難いものがある。そういう成り立ちと考えられる作をめぐっての項目は、内容の表す箇所か、創作時期の方かのいずれかに配列した。したがって、項目の配列順序には多少の違和感があるかも知れない。

あれこれ記してきたが、もともと浅学非才にして老耄ろうもうの身、見落としや考え不足もあつて、他の資料との間に食い違いが存しているかも知れない。もし、そんなことがあつた場合には、批判は潔く受けねばならぬ、と自身に言い聞かせている。なにとぞ大方のご叱正を賜りたいと思う。

目次

はじめに 1

I 父母のこと、幼少のころ……………17

一 母親「秀」（「おのぶ」）のこと 17

二 父親「以南」のこと 31

三 一人遊びはスプリングボード 45

四 「鯨になる」を信じた八、九歳頃 48

II 青年時代と出家得度……………52

一 三峰館入塾から十九歳春までの経緯 52

〈榮藏の結婚〉61 〈名主見習として〉65 〈三度目の入塾〉80

二 十九歳春から二十二歳の得度まで 84

〈蘭谷萬秀の退隠〉89 〈座禅修行へ〉101 〈大忍國仙の門下へ〉114

III 禅僧良寛の誕生……………120

- 一 大而宗龍への請見で得たもの 120
- 二 いわゆる「良寛の猿ヶ京関所通行手形」をめぐって 136
- 三 國仙に家風を問う 142
- 四 「圓通寺」 151
- 五 國仙の与えた印可の偈 157
- 六 帰郷前の和歌、俳諧と「関西紀行」 165

IV 乞食行への道……………182

- 一 帰郷の決意 182
- 二 帰郷途上の糸魚川における漢詩 191
- 三 四国行脚、関東での兄弟子参見 200
- 四 圓通寺時代の作とされてきた漢詩四篇 205
- 五 筆意の転換 211
- 六 乞食行の純化が導き出した毬つき行 220

V 禅僧良寛の内なるもの……………228

- 一 「在りし昔のこと」 228
- 二 「千羽雀の羽音」 234
- 三 「穂拾ふ鳥」 236
- 四 「法の塵」 237
- 五 「うらやましくも」から「誰か知ららむ」へ 241
- 六 腹中の一切経 243
- 七 「騰々任天真」と「双脚等閑伸」 246
- 八 「とり残されし窓の月」 253
- 九 歌集「ふるさと」巻頭の和歌四首 257
- 一〇 赤南蛮は「貧道の最好物」 263
 - 一一 「息せきと」 267
 - 一二 「備賃」の推敲から見えること 269
 - 一三 「天上大風」という語 283

VI 「二人間として」への重心移動……………291

- 一 仙桂和尚 291

VII

「人間として」の生き方を求め続けた晩年

333

- 二 岩室の田中の松 294
- 三 「淡雪の中に……またその中に淡雪……」
孔子賛 306 300
- 四 『論語』の「仁」十五箇条 312
- 五 「常哀れみの心持し」 316
- 六 「答へよ」 321
- 七 書簡中、「野僧」に混じる「私」 325
- 八 「鐸ゆるぐもよ」 329
- 一 生臭ものへの対応 333
- 二 貞心尼の請見 339
- 三 合紙としての『論語』 356
- 四 「藜籠にれて」 366
- 五 「ねせもの」 392
- 六 「大沼をななめになして」 397
- 七 仮名戒語 409
- 八 「曲」という字 420

九 物品恵与の依頼状と盗み食いと 428

〈付表一〉良寛遺墨による法華偈頌の比較 434

〈付表二〉「はちすの露」所載の戒語と

『良寛墨蹟大観』収載の戒語（二〇種）に記された項目の一覧表 444

〈付表三〉「はちすの露」所載戒語中の項目一〜四七に該当する各戒語遺墨中の項目数 472

参考文献一覧 474

おわりに 481

人名索引 i